

『夫木和歌抄』所収萬葉歌について

——長歌訓の特質と価値——

樋口百合子

はじめに

『夫木和歌抄』^①（以下『夫木』と略称する）は一七〇〇首余の歌を収載し、萬葉歌は一三〇〇首を超え、すべて仮名表記である。所収歌数・萬葉歌数ともに、中古・中世私撰集（萬葉集專書を除く）の中で最多といえよう。

稿者は先に『歌枕名寄』（以下『名寄』と略称する）所収の萬葉集長歌について漢字本文表記と仮名表記に分けて考察を試みた。^②そこでは『名寄』は仙覚新点歌を収載するが、仙覚新点と異なる訓を持ち、また改訓も仙覚訓と異なっていることを指摘した。さらに『名寄』の依拠した萬葉集古写本は、仙覚の影響を受けない可能性が高く、仙覚以後失われた多くの非仙覚本の一本であろうと推定した。

では『名寄』より二十数年後に成立した『夫木』所収の

萬葉集長歌はどうであろうか。澤瀉久孝氏^③や佐竹昭広氏^④は早くにその価値について言及されたが、『名寄』とともに『夫木』も、所収萬葉歌の調査については十分なされてきたとはいえない状況である。

近年田中大士氏^⑤は一連の論考により、長歌訓が『萬葉集』の系統を考察するに有効であるという事を示した。田中氏は「平仮名訓の本には基本的に長歌に訓はなく、片仮名訓の本には長歌の訓が目立つという」こと、及び「片仮名訓本は共通の祖本を持つ」ことを明らかにした。

本稿は『夫木』所収の萬葉歌が、『萬葉集』の校勘に如何に資するかを討究する第一歩として、長歌を取り上げ、『夫木』の依拠した長歌訓が、仙覚本系か、非仙覚本系かを検討し、類題歌集所収の萬葉歌の様相を探るものである。

一 『夫木和歌抄』の伝本

本稿では『夫木』の伝本の系統については『新編国歌大観』解題（濱口博章・福田秀二）に従い、静嘉堂本を底本とし、書陵部本、永青文庫本を参照し、併せて寛文五年刊本を見ることが^⑤にした。

『校本萬葉集十一 新增補』の「新增補版に採擇せる諸注釋書諸説の概要」中の「附載 萬葉集を引用せる書籍の古寫本」では、「古今和歌六帖・詞枕名寄・夫木和歌抄は全て刊本に拠る。」、さらに「詞枕名寄の刊本は一部新点の混入が認められ、殊に本文・訓を併せ引いた類において寛永版本萬葉集による修正の跡が著しい。」とする。『夫木』については新点との関係について述べていないが、濱口氏^⑦は「仙覺新點歌流傳の一形態」において「夫木抄の板本（寛文五年刊本を指す（稿者注））の方が寫本よりも新點に近いことについては觸れなかったが、板本は寛永板萬葉集あたりの訓によつて改めたのであらうと考えてゐる。」と述べ、寛永版本による修正の可能性を述べている。

そこで『夫木』写本（静嘉堂本・書陵部本・永青文庫本）と刊本、寛永版本萬葉集・西本願寺本萬葉集^⑧、廣瀨本萬葉集を比較し、刊本における修正の有無の検討を行った。

【例A】に挙げる巻三・322番歌は上田英夫氏によつ

て「純粹の新点歌^⑨」とされるが、『夫木』では「巻二十雑部二」に「嶺 いよのたかね 伊予」として以下の如く掲載される（伊予）の下の「万三」は静嘉堂本に記された集付。『夫木』は静嘉堂本を掲げ、刊本と異なるある歌句を傍線で示す。以下同。二重囲みは『夫木』写本・刊本。一重囲みは萬葉集古写本・寛永版本）

【例A】三・322（巻二十一・九〇八〇 雑部二 嶺 いよのたかね 伊予 万三）

〔静嘉堂本〕①しま山の②よろしき國と③さねしより④いよのたかねの⑤いさにはの⑥山をかたちちて⑦うたおもひ⑧ことおもひせし⑨みゆの衣の⑩きむらをみれば⑪おほきみも（写本間の異同は以下に示す。以下同。④いよのたかねの（永）⑩きむねをみれば（書））

〔刊本〕①しま山の②よろしき國と③こゝしき④いよのたかねの⑤いさにはの⑥をかたちちて⑦うたふおもひ⑧いふおもひせし⑨みゆのうへ⑩こむらをみれば⑪おみのきも
西本願寺本・寛永版本 ①嶋山^{シマヤマ}之②宜^{ヨロシキ}國跡③極此^{コトシキ}疑④伊豫能高嶺^{イゾノタカネ}乃⑤射狹庭^{イサノハ}乃⑥爾尔^{ニニ}立而⑦詞思^{ワカオモヒ}⑧辞思^{ハジメオモヒ}為師⑨三湯之上^{ミユノウエ}乃⑩樹村^{ツクリムラ}乎見者⑪臣木毛^{ヒメノキモ}（西本願寺本・寛永版本の異同は次に示す。以下同。⑤イヲニハノ（寛訓）⑦「詞」を消し別筆にて漢字の右に「歌」（西本文）「歌」（寛本文））

〔廣瀨本〕（訓のみ）①シマヤマノ②ヨロシキクニト③サネコ、

リ④イヨノタカネノ⑤イサニハノ⑥ヤマヲカニタチテ⑦ウ
タオモヒ⑧コトハオモヒシ⑨ミノウヘノ⑩キムラヲミレ
ハ⑪オホキ、モ

『夫木』写本と刊本の異同歌句は七句ある。これらは全
て、写本三本が一致し(④⑩小異有、刊本と大きく異なっ
ている。そして刊本のそれは寛永版本・西本願寺本とほぼ
一致するのである。特に③については、『名寄』細川本は
無訓(当該歌は漢字本文表記で朱訓(一部無訓)。他写本も朱訓で
はないが一部無訓)、廣瀬本は「サネコ、リ」、高原松平文庫
本『赤人集』も「さねこ、り」と訓む。『赤人集』、廣瀬本
が同じ訓を持つことは平安期から「純粹の新点歌」とされ
る当該歌が既に訓まれていたことを示すものであり、それ
と類似した訓を持つ『夫木』も同じく、仙覚の影響を受け
ずに当該歌を訓んでいた写本に依拠したといつてよいであ
ろう。また十四世紀中頃の成立とされる『名所歌枕』は、
渋谷虎雄氏が文永本に依拠したとしたが、当該歌句は「さ
わめしき」とあり、仙覚訓に一致しない。¹²⁾

他に卷六・1065番歌の第六句「百船純乃」の「もも
舟すみの」(『夫木』写本)と「モ、フナヒトノ」(『夫木』刊
本・西本願寺本・寛永版本)、卷十三・3314番歌(新点歌)
の初句「次峰経」の「峰つ、く」(『夫木』写本)と「ツキネ
フ」(『夫木』刊本・西本願寺本・寛永版本)など、同様の例が

あり、その数は上記のものを含めて二九首七〇歌句ある。¹³⁾
これは少なくとも数であり、刊本を作成するにあたり、修
正されたといつてよい。但し、異同歌句には写本間におい
て異同がある例や、刊本が一写本と一致し、それ以外の写
本が寛永版本、西本願寺本と一致するという例もある。ま
た一首の中でも歌句によって一致する写本が異なるという
煩瑣な状況を呈してもいる。

なお、修正された歌については『萬葉集』の巻や『夫
木』の巻による偏りは見られなかった。濱口氏は「寛永板
萬葉集あたりの訓によって改めたのであらうと考へてゐ
る」としたが、寛永版本に欠落する訓をも取り入れ、また
異同もあるので寛永版本のみによって改めたかどうかにつ
いては詳細に考える必要がある。

以上から、『夫木』成立時の所収萬葉歌を伝える伝本は
写本であり、刊本を用いる考察では、成立時の萬葉歌の状
況を正しく導き出すことはできない。よつて以下の考察は
三写本を用い、刊本を参考として進めることにする。

二 長歌の所収状況

(一) 長歌の依拠した文献

大部な類題集である『夫木』は『萬葉集』のみに依拠し
たのではなく、複数の資料に拠つたと考えられる。短歌の

場合、『萬葉集』以外に『人麿集』や『家持集』などの私家集、勅撰集、『古今和歌六帖』（以下『六帖』と略称）、『雲葉集』、『万代集』などの私撰集などの資料に拠っていることが集付より推定することができる。

長歌については、短歌に比して所収する文献がかなり少なく、『萬葉集』から直接採歌した可能性が高いと思われる。所収歌の集付は主として依拠した文献の名を示すと思われるが、長歌の集付はどうであろうか。

『夫木』所収長歌は一二〇首であるが、これは重出歌を一首と数えたものであり、延べ一七〇首となる（静嘉堂本を底本として調査し、書陵部本、永青文庫本を併せた）。

延べ一七〇首のうち集付を記さないものは三四首（静嘉堂本に記されている歌の数。静嘉堂本には集付名は記されないが書陵部本・永青文庫本に記されている例もかなりあり、これは静嘉堂本の脱落とも考えられる）で、残り一三六首には集付が記されている。そのうち『萬葉集』以外の集付は「六一・六二」の二例のみで極めて少なく、これは『六帖』の巻一・巻四を指すと思われる、『六帖』所収萬葉歌を引用したとおぼしい。但し、「六四」と記された歌は『六帖』の巻四にはない。「六四」という集付は『夫木』三本間で一致しているので誤写と思われるが、現存『六帖』以外の一本に拠ったと考えるべきである。残り一三四首には『萬葉集』の集

付が記される。そのうち「万」とのみ記されているのは五首で、残りは巻次も記されている。巻次の誤りは七例で、集付の九割以上が正しく、この状況から恐らく殆どは直接『萬葉集』から採歌したものと思われるのである。

また巻二・199番歌は六回引用されるが全て「万二」と記され、他の重出歌も誤写と思われるものを除き、依拠した文献が異なることを示すものは巻二・194番歌一首のみである。これは三回引用されているが、一つは「六一」つまり『六帖』巻一に拠ることを示すが、現存の『六帖』と訓が一致しない。¹⁵残り二つは「万二」と記され、『萬葉集』に依拠したと推定される。ところが、「万二」と記された二首は訓が異なり、同一の文献より収載したと思えない異同が存する。集付が同じでも必ずしも同一の『萬葉集』に拠ったとは言えない。これについてはさらに詳細な調査が必要であるが、今は長歌については『萬葉集』以外の集付は極めて少ないというに留めたい。

（二）長歌の所収歌句

『名寄』にも言えることであるが、『夫木』では長歌を収載するに際して一首の全歌句を採取することは全くといっていいほど行われていない。延べ一七〇首のうち、全歌句を収載するのは巻二・257番歌一首のみである（全歌句

数は十九。これを含め、『夫木』の所収萬葉歌の全歌句は六四九六句、このうち一二〇六句を所収し、平均七句、二割弱を収載する。類題歌集という性質上、歌題の前後のみを収載すればよしとした姿勢が窺え、これは名所歌集を含

表

10	9	8	6	5	4	3	2	1	卷次
3	22	6	27	10	7	23	19	16	長歌数
1	11	3	15	2	3	12	13	9	夫木長歌数
			1	1		4			長歌新点数
						2			夫木長歌新点数

合計	20	19	18	17	16	15	13	卷次
265	6	23	10	14	8	5	66	長歌数
120	3	6	3	11	2	1	25	夫木長歌数
112	6	5	10	14	8		63	長歌新点数
43	3		3	11	2		22	夫木抄長歌新点数

む類題歌集の共通する編纂姿勢である。全歌句を引用するのではなくても、長歌の一部から題に必要な歌語を含む数句を抽出するには、全歌句を収載する文献に依拠したと推定され、それは萬葉集古写本である可能性は高い。『夫木』の巻毎の長歌数を見ると(表参照)、殆ど長歌に訓を持たない平仮名訓本に比べて、『夫木』は一二〇首の長歌に訓を持つ。平仮

名訓本中最も訓の多い類聚古集の長歌訓が一〇首であることを考えれば『夫木』が依拠したのは明らかに平仮名訓本ではない。一方片仮名訓本は巻十までに多くの長歌に訓を持つが、巻十三以降では少なく、『夫木』の五一首という数に比して、訓の数が多い元暦校本二三首、廣瀬本二二首と二分の一程度であり、片仮名訓本との乖離をも推定させる。

田中氏は、長歌訓について片仮名訓本は巻十三以降では、巻十五と巻十九に訓が多く、その他の巻に訓が殆どないとした。『夫木』は巻十五や巻十九の訓はむしろ少なく、巻十三と巻十七の訓が多い。故に片仮名訓本に類似しているとは言い難いであろう。さらに新点歌を見ると、『夫木』は四三首に訓があり、これを見ると仙覚本系かと思われるのであるが、新点歌を多く収載しながら、仙覚新点とは大きく異なる訓を付しているのである。

三 仙覚新点との関係

(一) 先行研究

『夫木』所収萬葉歌と仙覚本との関係についての先行研究には、濱口氏、佐竹氏、渋谷氏、小川靖彦氏らの論があるが、佐竹氏以外は仙覚新点を取り入れているとする。

佐竹氏は「本文批評の方法と課題」の中で

夫木抄が、萬葉の訓讀を忠実に傳えていること、その
原本の善いものには仙覺新點の影響を見ず、古點次點
が正しく保存されていること、については濱口博章氏
が詳細に立証して居る。

と濱口論に關わつて述べている。¹⁶⁾ 濱口氏は

(上略)ここに比較的早く新點を採り入れたものとして
『夫木和歌抄』を擧げることができる。(中略)そのう
ちに新點歌は百五十二首の三分の一に近い四十七首を
含んでいる。この四十七首のうち長歌が四十二首あり

(新點の長歌は百十二首)(中略)ともあれ萬葉集の寫本で
もない夫木抄が新點歌をかなり多く収めてゐることは
注目に値しよう。(仙覺新點歌流傳の一形態)

とする。そこで濱口氏の新古兩點の歌を収載するとして挙
げた例歌を検討してみた。¹⁷⁾

【例B】三・389

Ⅰ古点 鳥つたひ①としまか崎を②こきまへは やまと恋
しく鶴さはになく

(稿者注(以下同) 卷二十六・一二二〇六 雑部八 崎 としまの
さき 摂津 万三)

Ⅱ新点 鳥つたひ①みぬめか崎を②こきまへは やまと恋
しく鶴さはになく

(卷二十六・一二二七五 雑部八 崎 みぬめの崎 敏馬 淡路)

としまか崎 他本 万三)

西本願寺本・寛永版本 嶋傳①敏馬乃埼乎②許藝迴者
日本戀久 鶴左波尔鳴(②「迴」(寛))

卷三・389番歌は『夫木』において二度所収され、濱
口氏は、一二一〇六番歌ではⅠ古点、一二一七五番歌では
Ⅱ新点を収載するとする(Ⅰ・Ⅱは稿者が便宜上付す)。第二
句①は萬葉集古写本では、類聚古集・古葉略類聚鈔・紀州
本・細井本二・京大本左代緒で「トシマ」西本願寺本以下
の仙覺本で「ミヌメ」であるが、西本願寺本の「ミヌメ」
は青訓ではない。また第三句②はⅠ・Ⅱともに「こきまへ
は」であるが、類聚古集・古葉略類聚鈔・紀州本・細井本
一・細井本二・神宮文庫本では「コキマヘハ」、西本願寺
本以下の仙覺本では「コキタメハ」であり、西本願寺本で
は「タメ」は「モト青」となっている。Ⅱは新点に拠つて
いるようであるが、②「こきまへは」が新点と異同があり、
新点に拠つたといえないのではないかと思われる。

濱口氏の挙げた他の例は省略したが、いずれの例も、
『夫木』が新点を採り入れていたことの証とするには、な
お慎重でなければならぬであろう。

また渋谷氏は『古文獻所収万葉和歌集成 南北朝期』の
『夫木和歌抄』の「誌」において編纂時から仙覺本を取り
入れているとし、小川靖彦氏も『萬葉学史の研究』におい

て「十四世紀初頭に東国で成立した藤原長清『夫木和歌抄』には早くも仙覚新点の影響が現れていることを言い添えておく。」と述べ、『夫木』編纂時に仙覚本を採り入れていることについて否定しない。このように、仙覚新点を受容したか否かについては説が分かれ、その調査も必ずしも十分とは言えない。そこで次に『夫木』は編纂時において仙覚本を取り入れているか否かについて検討してみる。

(二) 『夫木』所収新点歌の訓

(1) 新点と異同のある歌

『夫木』所収長歌一二〇首のうち、新点歌は四三首（静嘉堂本・書陵部本・永青文庫本三本にない歌3330一首を除く）、重出歌を入れると延べ五七首ある。この五七首の訓については『夫木』三写本と刊本、西本願寺本、廣瀬本と比較すると、西本願寺本との間に四九首において異同が見られる。

【例C】三・388（巻五・一七六八 春五 雑 万三）

【静嘉堂本】①いのねられねは②たきのうへの③あさのの雉

子④あけぬとて⑤立ちとよむらし⑥いさやこら①いもね

られねは（永）③あさの、き、す（刊）⑤たちよとむらし（刊）

【西本願寺本】①寐乃不勝宿者②瀧上乃③淺野之鳩④開去歲⑤

立動良之⑥率兒等

【廣瀬本】（傍訓は平仮名）①いのねられぬは②たきのうへの③

あさの、き、す④あけむとし⑤たちうこくらし⑥いさこら
か

④「あけぬとて」⑤「立ちとよむらし」⑥「いさやこら」は三写本及び刊本が一致し（刊本「よと」は誤写か）、西本願寺本は④「アケヌトシ」⑤「タチサワクラシ」⑥「イサコトモ」、廣瀬本は④「あけむとし」⑤「たちうこくらし」⑥「いさこらか」とあり、『夫木』、西本願寺本、廣瀬本の間で異同がある。④は「て・し」の草体の誤写・誤認とも考えられるが、三本とも一致しているので、誤写とするのにはやや疑問が残る。⑤は誤写と思えない異同であり、「動」は388番歌に関する限り「とよむ・さわく・うごく」という三通りの訓が存したことになる。⑥は『夫木』と廣瀬本は類似するが、一致するとはいえない。⑥も「いさやこら」（『夫木』）「イサコトモ」（西本願寺本）、「いさこらか」（廣瀬本）と三通りの訓が存したのである。

この388番歌の異同から『夫木』と廣瀬本には、直接の受容関係を認めることができなことが明らかとなろう。さらに先に挙げた巻三・322番歌も含めて西本願寺本との異同から、この二首については仙覚訓以外の訓の存在を認めざるをえない。

【例D】十三・3223（巻十九・七八〇七 雑部一 雷 万十

二（ママ））

〔静嘉堂本〕①なる神の②ひかるみ空の③長月の④時雨のふれは⑤かりかねも⑥いまたきなかつ(⑥いまたきかす(刊)永)いまたきかす(刊)

〔西本願寺本〕①霹靂之②日香天之③九月乃④鍾礼乃落者⑤

〔廣瀨本〕訓なし

卷十三・3223番歌は初出文献は『六帖』(書陵部本のみ。短歌に改作)である。『名寄』にも収載されるが、『六帖』・『名寄』・『夫木』の所収歌句はそれぞれ異なり、重なっていない。当該歌句を収載した文献は『夫木』が最初であり、①「なる神の」は西本願寺本と全く異なる訓である。『霹靂』については『和名類聚抄』に「加美渡計」とあることや『日本書紀』などの用例により現在の諸注釈では多く「かみとけの」と訓まれている。『霹靂』は萬葉集中孤例であり、平安以降は契沖の一首「夕立のなごりすずしみかみときのひかりのまにもさよ更けにける」のみである。一方「なるかみ」の用例は多い。『夫木』の依拠した本が、例えば『霹靂』の句のみ本文で二句以下が平仮名で記されていた場合、二句より「なるかみ」という訓を推定したということは考えられないだろうか。なお、「なるかみの」と訓むのは『萬葉集童蒙抄』と澤瀉氏の『萬葉集注釈』のみである。

他に卷十三・3230番歌の「なてしこの」(『夫木』写本、『夫木』刊本・西本願寺本は「石走」)は、『夫木』では平仮名表記であり、本文は不明だが、西本願寺本「石走」については、異同は僅かに元暦校本において「走」の左緒「麦坎」があるだけであり、訓「なてしこの」に繋がるような本文はない。萬葉集中には「石走」は当該歌を含め一〇例あり、訓は「イハハシル・イハハシリ・イシハシリ」などで「イシ」か「イハ」か、「ハシル」か「ハシリ」程度で大きな異同はない。「石走」を「ナテシコ」とは訓めないと思われる。「ナテシコ」は集中で二六例あり、一字一音表記が一四例、「瞿麦」が八首九例(題詞に一例)、「石竹」が三例(題詞に一例)、他に卷十八・4070番歌の題詞に「詠庭中牛麦花歌一首」という表記がある。あくまでも推定であるが、「石走」の草体を「牛麦」と誤写し、それに「ナテシコ」という訓を付したとも考えられる。いずれにせよ、『夫木』の依拠した『萬葉集』は本文・訓とも特異な一本であったと思われる。

卷十三・3227番歌の「天降座兼」は『夫木』「あまくたります」、西本願寺本「アモリマシケム」と訓む。「天降」は集中では他に二首の用例があり、卷三・257番歌では紀州本・細井本「アマクトル」、西本願寺本「アモリツク」(「モリツク」モト青)、卷三・260番歌は紀州本・

細井本「アマクタル」、西本願寺本「アモリツク」(「モリツク」青)とある。つまり「天降」は次点本において「アマクタル」と訓まれていた。『夫木』の3227番歌の訓はそれを踏襲した一本に拠ったのであり、仙覚新点に依拠したのではない。

これらの例は、新点歌とされるにもかかわらず、仙覚の新点とは異なる訓が、確かに存在したことを示すものであり、現存しない非仙覚本系の萬葉集古写本の一本を伝える訓であると考えてよいであろう。

(2) 新点と異なる無い歌

『夫木』所収の長歌で、引用歌句の訓が西本願寺本と全く異なるない歌は、九首「十三・3240、3243、3300、十七・3907、3973、3978、3991、3993、4008」で、卷十三と卷十七に集中する。中でも卷十七は一字一音表記の歌で難訓とはいえない歌々である。残る卷十三の三首の中から、一首を挙げてみよう。

卷十三・3243番歌は『夫木』の写本・刊本間に異同はなく、また西本願寺本との間にも異同はなく(廣瀬本は無訓)、この歌句はいずれも訓むことが困難ではない。

【例E】 十三・3243 (卷二十五・一一五二 雑部七 浦

ながとのうら 長門 万十三)

【静嘉堂本】 ①なかとのうらに②あさなきに③みちくるしほ

の④ゆふなきに⑤よりくる浪の(書・永・刊異同なし)

【西本願寺本】 ①長門之浦丹②朝奈祇尔③満来塩之④夕奈祇尔⑤依来波乃

①「長門之浦丹」は、題詞に「長門浦」が二例あり、長門国もあるので、訓むことは容易であろう。②「朝奈祇尔」も全く同じ表記はないが、類似する表記は多い。また④も②と同様同じ表記はないが、難訓ではない。③「満来塩之」は「四・617満来塩乃、十二・3159満来塩能」と同じ表記が二例あり、類似する表記が一例「十九・4211満来潮之」ある。⑤は全く同じ表記はないが、類似する表記「七・1206依来十方 七・1159縁来浪乃」がある。つまるところ、3243歌は新点歌とはいえないものの、新点でない歌の訓により、訓むことが十分可能であった。『夫木』所収の3243番歌の歌句と仙覚訓が一致したとしても、『夫木』が仙覚本に依拠したと断じることはできないのである。他の新点歌と訓が一致する歌についても同様である。

四 仙覚改訓との関係

次に『校本萬葉集』の西本願寺本の訓において「青、モト青、モト青カ」と記された、仙覚の改訓と見做される訓と『夫木』の訓を比較し、仙覚の影響が『夫木』に及んで

いるか否かを検討してみる。『夫木』所収長歌の改訓歌句は全部で一・二句、そのうち改訓と一致するのは三一句である。

(1) 改訓と一致しない場合

【例F】二・167 (卷三十・一四二二三 雑都 きよの都

万二)

【静嘉堂本】①たかてらす②日のわかみこは③とふ鳥の④きよきみやこに⑤神のまに⑥ふとしきまして(④きよのみやこに(永、書・判異同なし)

【西本願寺本】①高照②日之皇子波③飛鳥之④浄之宮尔⑤神随⑥太布座而

③は『夫木』では写本・刊本とも「とふ鳥の」であるが、西本願寺本では青訓「アスカノ」となっている(紀・廣トフトリノ)、また④「きよきみやこに」は、西本願寺本では七字とも青訓で「キヨメシミヤニ」(紀・廣キヨノミヤコニ)となっている。この青訓との異同は、『夫木』が仙覚新点の影響を受けていないことを如実に表すものといえる。他の例は紙幅により省略するが、仙覚改訓とは一致しない訓は、一致する訓よりかなり多いのである。ところが『夫木』所収歌句が、改訓と一致するものも存する。これはどのように考えればよいのであろうか。

(2) 改訓と一致する場合

【例G】九・1785 (卷三十五・一六四八二 雑部十七 帝王

万九)

【静嘉堂本】①ありしあひだに②うつせみの③よのひとなれば④おほきみの⑤みことかしこみ⑥あまさかる⑦ひなをさめにと(書・永・判異同なし)

【西本願寺本】①有之間尔②虚蟬乃③代人有者④大王之⑤御命恐美⑥天離⑦夷治尔登

①③はそれぞれ西本願寺本の「モト青」訓と一致している。ところが集中に「有之」の用例は四三例あり、このうち六例「二・183、190、十・2073、十二・3140、十六・3871、十九・4269」において「アリシ」と訓んでいるので、「アリシアヒタニ」と訓むことは可能であらう。③は元暦校本「ヨヒトニアレハ」、紀州本「ヨノヒトアレハ」であるが、西本願寺本では「ヨノヒトナレハ」とあり「ナレ」は「モト青」である。集中には卷四・729番歌「世人有者」を類聚古集・廣瀬本に「よのひとなれば」(元暦校本に「よのひとなれ」と)、卷八・1452番歌「闇夜有者」を廣瀬本に「カミナレハ」と訓む例があり、これらは「有者」を「ナレハ」と訓んでいる。他の改訓と一致する訓は、逐一挙げないが、一致しても、それが仙覚本に依拠したと断定することには慎重でなければならぬ。

五 『夫木和歌抄』の独自訓

『夫木』所収萬葉歌には、古次点訓とも改訓とも一致しない『夫木』独自の訓も多く存する。『夫木』には一二〇首（延べ一七〇首）の長歌が収載されているが、その中で『夫木』以前には収載されていない（『夫木』が初めて収載）歌が五首ある。この中に『夫木』の刊本のみ収載される歌が一首（3973）あるが、これは寛文五年板行の際に差し替えられた歌であり、『夫木』原撰本には収載されていないと考え省いた。次に『名寄』が初めての引用文献であるが、それを除けば『夫木』が最初の引用文献であり、かつ『名寄』の刊本のみ収載されている歌が二首あり、これは『夫木』が最初の引用文献と考えることができる。これらを合わせると六首となる。これらに付せられた独自の訓は、『夫木』の編者（長清）が付したというよりは、『夫木』が拠った現存しない萬葉集古写本もしくは萬葉歌を収載する歌集・歌書に存在したものであろう。

【例H】 十三・3291 新点歌（巻二十・八三六八 雑部二山 集付なし）

【静嘉堂本】①み吉野の②横たつ山に③みとりなる④山すけのねの⑤ねんに⑥我が思ふ君は（書・永・刊異同なし）

【西本願寺本】①三芳野之②真木立山尔③青生④山菅之根乃

⑤慰勤⑥吾念若者

③「青生」は「夫木」は「みとりなる」、西本願寺本は「アヲミオフル」と訓む。「青」を「みどり」と訓む例は集中には見られない。集中では「ミトリ」は「ミトリコ」の例が多く（二例中「浅緑」「緑丹」各一例、その他は「ミトリコ」一字一音表記は一例）、「若児・若子・緑児・緑子・小児」という表記が用いられている。この「みとりなる」という訓はかなり特異といえよう。他に【例A】③や注（28）で挙げた四例も『夫木』の独自性を表すものである。巻十三3223番歌「なる神の」や巻十三3237番歌「いととりおきて」のように現行注釈書と同じくする訓もある。また短歌であるので本稿では取り上げなかったが、巻三268番歌「婦」の如く『夫木』により訓を改めた例もあった。『夫木』編者の誤写・誤認などではなく、現存しない非仙覚本系の一写本の訓を伝えるものと考えてよいであろう。

終わりに

『夫木』所収萬葉集長歌について、これまで述べたことをまとめると以下の如くである。

(1) 『夫木』所収萬葉歌を静嘉堂本、書陵部本、永青文庫本・寛文五年刊本と西本願寺本、寛永版本と比較した結果、刊本所収萬葉歌には修正が多く存した。『夫

木』編纂時の萬葉歌の姿を伝えるのは写本であり、調査・討究は写本に拠つてなされなければならない。

- (2) すべて平仮名表記であり、長歌の付訓の数から、非仙覚本系の平仮名訓本、片仮名訓本のいずれとも異なる古写本に拠ると思われる。仙覚文永本系の一本を資料としたのではなく、渋谷氏のいう「古・次点訓と文永本の両者に拠る」のでもなく、仙覚本以外の（仙覚以前か以後かは不明であるが）、現存する非仙覚本系とも異なる、かなり多くの新点歌に訓を持つ古写本に依拠したのであろう。改訓も同様で、仙覚本系とは異同も多くある。

- (3) 次点歌・新点歌ともに現存本と異なる独自の訓が多く、特異な本文を類推できる訓もある。

- (4) 廣瀬本とは仙覚本系に比して近いが、廣瀬本に訓のない歌も多く収載していることから、廣瀬本もしくはその系統に拠るものではない。同様に『夫木』より少し前に成立し、多くの萬葉集長歌を収載する『歌枕名寄』とは、共通する萬葉歌も多いが、影響は受けていない。

『名寄』について『夫木』も長歌の訓を見る限り、仙覚本の影響を受けたとは言えず、非仙覚本系の現存しない写本によると思われる。そこには仙覚以外の人によつて付訓

された仙覚訓と異なる訓があり、現存する萬葉集古写本にない、特異な訓が存在した。『名寄』と同一系統ではないことから、『名寄』『夫木』の成立した鎌倉時代後期には、新点歌に仙覚訓以外の訓を持ついくつかの写本が存在したと思われる。

萬葉歌の中でも、特に『萬葉集』に依拠したとおぼしい長歌を多く収載する、中世成立の類題歌集は、現存する伝本からより原撰本に近い一本を見極め、萬葉歌を検証するならば、『萬葉集』の伝来、伝本、訓読に關つて少なからぬ意義を將來するものである。特に所収文献の少ない長歌は、失われた多くの非仙覚本中の一本である可能性もあり、その検証の示唆することは少なくないと思われる。

注

本稿の引用歌は特に記さない限り『新編国歌大観』に拠る。萬葉集古写本及びその略号は『校本萬葉集』（新増補・別冊を含む）に従つた。但し神田本は紀州本、略号は紀、寛永版本の略号は寛とした。

- (1) 『夫木』は延慶二、三年頃（一三〇九—一三二〇）成立。編者は冷泉為相の門弟藤原（勝間田・勝田）長清とされる。

- (2) ①「中世名所歌集にみる『萬葉集』長歌の享受と特質——細川本『歌枕名寄』を中心として」『上代文学』一一

七号 二〇一六 ② 『歌枕名寄』所収萬葉集仮名表記

長歌について―非仙覚本と仙覚本の間をつなぐもの―

『万葉集伝本の書写形態の総合的研究 論文編』国文学

研究資料館共同研究(特定研究) 研究成果報告書 二〇

一七

(3) 澤瀉久孝「千鳥鳴なりつま待ちかねて」『萬葉古径』

三 日本書院 一九五三

(4) 「萬葉集の本文批判の一方法」〔佐竹昭広集〕第一卷

『萬葉集訓詁』岩波書店 初出『萬葉』第四号 一九五

二) 「本文批評の方法と課題」〔萬葉集大成〕第十一卷

平凡社 一九五五

(5) 「長歌訓から見た萬葉集の系統―平仮名訓本と片仮名

訓本」〔和歌文学研究〕八九号 和歌文学会 二〇〇

四) 他一連の論考。

(6) 『新編国歌大観』は静嘉堂本を底本とするが、永青文

庫本、書陵部本、寛文五年版本による校訂を加えた本文

である。本稿では各写本の特性をも考察するために、各

写本の本文を用いた。静嘉堂本―山田清市・小鹿野茂次

『作者分類 夫木和歌抄 本文篇』(風間書房 一九六

七) に基づき、原本を調査。書陵部本―圖書寮叢刊『夫

木和歌抄』一〇五 索引上下 (宮内庁書陵部 一九八

四) 一九九三) に基づき、原本を調査。永青文庫本―細

川家永青文庫叢刊5『夫木和歌抄』上下 別冊初二句索

引(汲古書院 一九八三) 一九八五)。刊本―寛文五

年版 『校本萬葉集 新增補』十一―十六 第二刷(岩

波書店一九九五―一九九五) に基づき、大阪府立図書館

蔵本を調査。以下静嘉堂本―静、書陵部本―書、永青文

庫本―永、寛文五年版本―刊本・刊の略号を用いる。

(7) 『萬葉』第四一号 一九六一

(8) 林勉監修『西本願寺本萬葉集(普及版)』巻一―二十

おうふう 一九九三―一九九六

(9) 上田英夫『萬葉集訓詁の史的研究』(塙書房 一九五

六) に拠る。

(10) 322番歌は重出歌であり、「巻三十五・一六四七四

雑部十七 帝王 大王」にも所収されるが、こちらも

「万三・赤人」と集付・作者名とも九〇八〇番と同じで

あり、『夫木』写本及び刊本の四本において異同はない

ので、ここでは取り扱わない。

(11) 『名寄』所収322番歌については注(2)①におい

て述べた。

(12) 『名所歌枕』と仙覚本との関係については、渋谷氏の

『古文獻所収万葉和歌集成 南北朝期』(桜楓社 一九八

三) に詳細な考察があり、新点「約一一例」、改訓「約

六二例」の一致をみることから文永二、三年本に拠ると

されたが、仙覚本の流布とも関わる問題であり、新点・

改訓についての詳細な検討が必要であるので、別途考察

したい。

(13) 廣瀬本は巻六・1065番歌は『夫木』写本に一致し、

巻十三・3314番歌は無訓である。

(14) 『袋草紙』には所収歌数「四千六百九十六首」とあり、

現存本よりも歌数の多い『六帖』の存在を示している
(佐佐木信綱『日本歌学大系』第貳巻 文明社 一九四〇、風間書房 一九九一版に拠る)。

(15) 『六帖』には一〇首の長歌が所収され、そのうち五首

が短歌に改作されている(うち一首は書陵部本のみ在所収)。「夫木」所収の巻二・一九四番歌を静嘉堂本所収の訓で示すと次の通りである。「夫木」巻二十四 雑部
あすか川「とふ鳥のあすかの河のかみつせにおふるたまもは下つせになかれやれふる玉もなりけり」・「夫木」巻二十八 雑部 藻「とふとりのあすかの川ののぼりせにおふるたまもはくたるせに流れふれけり」

(16) 濱口氏は「仙覺新點歌流傳の一形態」の中で「わたくしが旧稿の中で立証したと述べられたのは、氏の卓説に關係はないが御記憶ちがひであらうかとこの際一言しておく」と否定された。

(17) 濱口氏は同書の中で「寛文五年板本を底本とし、陽明文庫本、天理大学付属図書館本、池上禎造教授本を参照した」とする。

(18) 巻八・1431番歌は四句がIでは「をりし」、IIでは「すみし」(居之)、類聚古集以下(紀・細・宮・京左代緒・廣・宮左)では「をりし」であり、西本願寺本以下の仙覺本系では「すみし」である。『六帖』『五代集歌枕』『色葉和難集』などの『夫木』成立以前の歌集・歌書において「すみし」とある。最近の徳植俊之氏の「梅尾類切」考(『汲古』72号 二〇一七)掲載の図版にも

当該歌が「すみし」とある。これらは、当該歌の第四句が平安時代からすでに「すみし」と訓まれていたことの証となる。なお、西本願寺本では青訓ではない。

(19) おうふう 二〇〇七

(20) 「雷電霹靂」(巻九神功皇后撰政前紀仲哀天皇九年)、「霹靂木也」「霹靂」(巻二十二推古天皇二十六年)、「霹靂」(巻二十九天武天皇七年)。いずれも「カミトキ・カントキ」と訓む。(『新訂増補国史大系』上・1下) 吉川弘文館 一九六六・一九六七 底本は寛文九年刊本)。訓みの異同なし。古訓を伝えると言われる『日本書紀私記丙本』(『新訂増補国史大系』8 一九六五)に「當時雷電霹靂」の右に「止支尔加牟止支、志氏」と訓を記す。

(21) 山口佳紀「霹靂之日香天之」歌の解釈―『萬葉集』三二二三番歌について『論集上代文学』第三十六冊 笠間書院 二〇一四

(22) 『新編国歌大観』によると「いかづち」は「神」に続く例が多く(十八例、萬葉歌を除く。以下同)、「なるかみ」は「音」に続く例が多い(九四例)。

(23) 「なるかみ+ひかり・ひかる」(二三例)の用例は「いかつち+ひかり・ひかる」(二例)よりはるかに多い。

(24) 当該歌は『名寄』には全歌句漢字本文表記訓付で所収され、しかも西本願寺本と一致しない訓が存する。『夫木』所収歌句については「夫木」とも西本願寺本とも異同はない。猶、当該歌は『名寄』以前に所収する歌集・歌書はない。

(25) 卷七・1391朝奈藝尔、卷八・1520朝奈藝尔、
卷十三・3301朝奈伎尔など。

(26) 卷十三・3301暮奈藝尔、卷十三・3302夕難岐
尔など。

(27) 「緑」を「あを」と訓む例は「アラニヨシ緑丹吉」(卷十三・32
37)一例があるが、澤瀉氏は『萬葉集注釋』卷十三に
おいて元暦校本・天治本・細井本に「緑青吉」とあり
「緑青」二字で「アラニ」の正訓の文字と見る」とし、
伊藤博氏も賛同された。

(28) 卷九・1787御命恐弥ミコトカシコミ(西)―みことおそしみ(『夫
木』写本異同なし)、卷十三・3237絲取置而イトリヲキヅ(西)
―いととりおきて(『夫木』写本異同なし)、卷十三・3
239新点歌末枝尔ホツユニ(西)―すゑ枝には(すゑえたに
は『夫木』〈書〉すゑたには『夫木』〈永〉)、卷十三・3
305新点歌道行去毛ミチユキナムモ(西)―道行き行きも(『夫木』
写本異同なし)、卷十三・3314純粹の新点歌
次嶺經ツキネフ(西)―峰つ、く(『夫木』写本異同なし)など
も独自訓である。

付記

本稿は平成三十年一月の上代文学会例会での発表を骨
子とする。席上で御教示を賜った諸先生方に記して深謝
申し上げる。なお本稿は日本學術振興會科学研究補助金
の助成(基盤研究C 課題番号18K00279)に基づき成果の
一部である。